

キャラクター名 \_\_\_\_\_ プレイヤー名 \_\_\_\_\_  
 生喜 須玉 (いき すだま)

シンドローム	エグザイル	ワークス	泥棒	カヴァー	ホームレス
	エグザイル				
オプション		年齢	24歳	性別	女
覚醒	死	衝動	恐怖	初期侵食率	35 %
出自	親戚と疎遠	経験	喪失	邂逅	借り

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	29
肉体	4	0	0			4	行動値	7
感覚	2	1	0			3	(非装備時)	7
精神	0	0	1			1	戦闘移動	12
社会	2	0	0			2	全力移動	24

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			RC			交渉		1
回避	1		知覚	1		意志	1		調達		
運転:	2		芸術:			知識:	2		情報:裏社会	3	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ
特殊プラスチックシールド	8	4	-2		

所持品		合計装甲:	4	合計回避:	-2
		ロイス			
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイム	消費	
親戚	P 同情	N 無関心			
親	P 慕情	N 不安			
"マスターレイス"を名乗った少年	P 好意	N 敵愾心			
	P	N			
	P	N			
	P	N			
	P	N			
	P	N			
最大財産P:	4	残り財産P:			

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
崩れずの群れ	1	2	オート	至近	自身	自動	-	
効果: 1メイン1回、カバーリング可								
異形の守り	1	2	オート	至近	自身	自動	-	
効果: パステ1つ回復、重圧でも使用可								
がらんどうの肉体	5	3	オート	至近	自身	自動	ピュア	
効果: 1R1回、ダメージ (Lv) D								
自動触手	7	2	オート	至近	自身	自動	-	
効果: 1R1回、(Lv×3) 点の反撃								
鍵いらずの歩み	1							
効果:								
異形の歩み	1							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

親について、実はほとんど知らない。何をしていた人なのか、どこ出身でどんな学校を出てどんな生活を送っていたのか、それを知る術は無いし、知る気もない。けど、彼ら、彼、彼女、誰だか知らんが親は自分にとても暖かく接してくれていたような、気がする。あまり覚えてないのも仕方ないだろう。親が死ぬにはあまりに幼な過ぎたし、なにより親の死に顔すら知らない。私はそれ以降、親戚に預けられた。親戚は私を嫌った。理由は中学の頃に知らされた。親は莫大な借金持ちだったらしい。そりゃ、嫌うわ。私は嘲笑混じりの呆れとともに親戚に聞いた。じゃ、手早く稼いで借金を返すから、何でもいいから仕事くれよ。

身壳、花壳、薬壳、鬼になるか蛇になるかと自身の暗澹とした未来を子どもらしい想像で描いていた私が渡された仕事は予想をはるかに超えた、夢物語ながらファンタジックまがいの暗黒童話——人類の進化のための研究材料になることだった。

親の借金先がその研究所だったのだろう、と少し時間が経ってから思うようになった。もしかしら親はこの研究所の職員だったのかなあ、なんて思っている。実験だか何だか知らないが、もはや人権もくそもなくなった私である。研究者たちがひたすら肉体改造まがいの研究を繰り返した日々の中、明日死ぬか、今日死ぬか、今死ぬか、と思う日々を過ごした。そんな自殺も許されず生かされていた私を外に出したのは——よく覚えてない。確か、"マスターレイス"とか言われてたような、呼ばれてたような、名乗っていたような人物だったか。まあとにかく、幸か不幸か、運よく、運悪く、幸運に不運に導かれて私は壊滅した研究所でただ一人生き残った。

私の戸籍はどこにも存在しなかった。研究所に売られたその日に病気がかかて"死んだ"という。ここに死人が生きていることを知る人はいない。じゃ、生きるか。とりあえず生きて、その先でどうするか決めよう。そうして今日も私は、夜に、朝に、辛い時に死にそうな時に私であり続けようとするときにつぶやく。生きるために、生きるために、生きるために生きてやる。——こうして一人の生霊 (いきすだま) が白昼夢の中、町を彷徨っているってわけだ。